

「朝鮮半島と日本のつながり」に関する参考レポート

このレポートは「まゆみさん」のページで7回に分けて掲載されたものをそのままコピーしたものです。その内容があまりにも素晴らしいので我が歴史研究室に保存させていただきます。

もちろん、全部を認めるわけではありませんが論議する上でのたたき台としてはとても素晴らしいものです。従来の皇国史観に犯されている方には理解が難しいかとは思いますが日本の事を韓国の人から教えてもらうというのはちょっと情けない気もしますね。

金達寿氏の

「日本の中の百済・高句麗・新羅」

「日本の中の高句麗文化」

「日本の中の天日槍」

より一部抜粋書き写しましたので、ご自分の判断でお読みください。

「日本の中の百済・高句麗・新羅」

日本と朝鮮とのつながり

・・・ところがそうではない。新井白石が言ってるように、上代のことは漢字にとらわれてはならない。音が大事なんです。朝鮮も新羅時代にできた「リト」がありまして、これは朝鮮語を書き表すために漢字を借りて用いていたものです。・・・万葉仮名が朝鮮のリトに当たるものです。万葉仮名は表音文字です。

任那については後でちょっとしゃべりたいと思いますが、加耶諸国のなかに安羅（あら）という国があったのです。日本では安羅と書いていますが、阿羅とも書きます。朝鮮の古代を理解していただくうえで、これは非常に重要な要素をなしています。

安羅は阿耶、阿那ともなります。これは同じ意味で、安羅とも言い、阿耶とも言い、阿那とも言うということです。これは日本の古代史を見るうえで、あるいは古代の地名などを見るうえで非常に大切なことですから、覚えておいて欲しいのです。

羅、耶、那というのはどういう意味かといいますと、朝鮮語の国土という意味です。大国主命は大穴持命とも書きます。・・・大穴は阿那、つまり大きな国、大国主命と後に翻訳されるわけです。

滋賀県の近江の草津市に行きますと、穴村というところがあります。今は草津市穴ですが、昔は穴村と言ったんです。・・・ここに行きますと安羅神社というのがあります。今の若い人たちはヤスラ神社とも言っていますが、元はアラ（安羅）神社です。

* 王仁三郎の穴太村を想起

この神社は、新羅の皇子とされている天日槍（あめのひばこ）を祭る神社です。これは今でもはっきりそう書かれてあります。日本ではっきり書かれているのは珍しいのです。・・・

この安羅は阿羅ということです。だから近江に行くと穴太衆とか、高穴穂の宮というのがあります。吾名(あな)とか色々字を変えますが、そういう地名が近江にはたくさん残っています。

我々が日本の古代史を知るためには、加耶の国というのは非常に大きな要素になっていきます。

先ほど言った任那ですが、どうして「みまな」と読むのでしょうか。僕は子供のころから疑問に思ったのは、先ほどの神功皇后に出てきた王仁です。これをどうして「わに」と読むのですか。あるいは、百済をどうして「くだら」と読むか。日本語で「ひやくさい」だし、朝鮮語では「パクチェ」です。どうして「くだら」と言うのか。

もっと卑近なところでは、石上玄一郎という作家がいて、大和に石上神宮があります。これはどうして「いそのかみ」ですか。「いしがみ」か「いしうえ」でもいいのに。そのように任那がいったいどうして「みまな」かということです。

これは先ほどの鮎貝房之進氏の「雑考」にも出ているように、簡単にいいますと任那、那は先ほどの国土の意味だと言いましたが、任那の任は主、主君の国という意味です。

・・・今度は秦氏について見ましょう。大宝二年(702年)の戸籍台帳が残っていて、それを見ると豊前の国の人口の9割以上が秦氏族です。・・・宇佐八幡宮、八幡信仰はここから起こりました。・・・

彼らが上陸した北部九州から、田川郡に行くと例の「月が出た」という三池炭鉱の歌で有名な香春(かわら)岳がありまして、そこに香春神社があります。これは新羅からみずから渡ってきたという女神を祭る神社です。

その女神が今度は宇佐にやってきます。香春岳と宇佐と密接な関係がありまして、香春岳の裏には「採銅所」というところが今でもあります。宇佐神宮の神鏡をつくったところです。その宇佐神宮は香春神社と同じ女神が中心です。あとから応神天皇と神宮皇后が併祭されます。

そこから国東半島に出てまいりまして・・・比売語曾神社というのがあるんです。これも宇佐神宮と同じ女神です。

そこからにわかには東転して瀬戸内海に入ってきます。・・・呉に亀山神社というのがありますが、これも同じ女神の神社です。

朝鮮から渡ってきた神社

そのようなことで調べてみると、日本の歴史が非常に面白くなってきたんです。こんな面白いものはない。

しかも三品彰英氏がはっきり書いているように、「古事記」「日本書紀」をちゃんと読むためには古代朝鮮語を知らないとだめです。はっきり言いますと、古代朝鮮語で書かれたものです。しかもよくみて見ると、佐久克明氏なども書いていますように、「古事記」は新羅系の渡来人によって書かれ、「日本書紀」は百済系の渡来人

によって書かれたものです。

ですから、「古事記」を読んでみると、新羅に対する敵視はあまりないんです。ところが「日本書紀」を見るとがらりと変わります。新羅を蛮国視する。敵視するわけです。そして百済や高句麗はもはやないんです。……ところがこれが非常に正直なもので、……書紀の天智天皇段を開いてみてください。いかにも「日本書紀」は百済系の連中が書いたことがはっきりとわかります。……要するに天智朝と百済とは一体のものだったということです。

.....

そういう経過をたどってくるのですが、……「広辞苑」をみますと、ただし、第一版です。第二版ではどういうわけか、それを消しているんです。ぼくなんかがそれを引用したりするからということもあったかと思いますが、一版を見ますと、「韓神の祭り」というのがありまして、そこに上代において二月十一日に行われた宮内省の内にまつられてある韓神社の祭と書いてあります。

二月十一日がどういう日かご存知ですね。今は建国の日と言いますが、昔の紀元節です。つまり上代の二月十一日には、宮中で韓神の祭りが行われた。そればかり神楽というものがあります。宮中神楽です。宮中神楽でない神楽は里神楽と言います。宮中の神楽はどういう神事かといいますと、韓神を招く神事です。

「三島木綿肩(みしまゆう)にとりかけ、われ韓神の韓招(からお)ぎせむや、韓招ぎせむや」という韓神を祭る神事です。何がゆえに宮中で朝鮮の神様を祭るのですか。「延喜式」をみますと、園韓神の社というのは三社あるんです。宮内省坐園韓神三座(くないしょうにますそのからかみさんざ)というのがそれですが、韓神は百済の神で、宮内省に二社あります。……文字から見ると、園というから公園の神様か、花壇の神様か、今の感覚では思っちゃいます。これは一語ではなくて「ソの」という二語です。

つまり新羅を昔はソラボル、ソヤブル、ソナブルと言ったし、ソブルとも言った。……ソウルは都という意味です。京都です。……ソというのは新羅の元号です。

このように新羅系の神であり、百済系の神が二座、宮中に祭られている。このことによって王朝の交代がわかります。中国や朝鮮では、こういう場合は消してしまうんです。日本は実に面白いです。神社もよく残っている。日本人はものの考え方が調和的ですから、捨てないのです。

ぼくは神社というものが嫌いだったんです。戦時中に強制参拝させられましたから。……ところが戦後になって日本の歴史をだんだん調べているうちに、なんとこの神社が朝鮮から来たものなんです。しかも新羅から来た。これにはまた驚きました。

「三国志」にはっきりと出ていますが、新羅の初代王を赫居世(ヒョクコセ)といい、赫は名で、居世は様というほどの尊称です。この王が亡くなって祖神廟ができたのが西暦紀元五年で、これが487年に「神宮」になります。前川明久氏の「伊勢神宮の祭祀制」をみると、「神宮の称号の起源は新羅の神宮に由来している」というその神宮です。

では、神社の社はどうかと言うと、これは「居世」という尊称からきたコソだったものです。

先ほど、比売許曾（ひめこそ）神社のことを言いましたが、そのコソです。つまり神社は社（こそ）です。伴信友がはっきり書いているように「神社とは古曾のこと」つまり社（やしろ）のことです。・・・「社」は「こそ」です。社というのは名前ではなくて、尊称です。

そういうことで神社は朝鮮で始まったわけですが、仏教が入ってきます。日本人は物事の考え方が非常に調和的ですが、われわれ朝鮮人は悪く言うとあれかこれか主義で、対決的です。よく言えば論理的です。

そういうふうに神社や神宮は古代朝鮮から渡ってきて、しかも日本ですべて花ひらいている。そればかりかわれわれは今日古代史を知るために、仏閣はもちろんですが、神社が非常に役立っている。*****

関東に見る高句麗・新羅・百済系

先ほど秦氏の八幡様が全国にたくさん広がったと言いましたが、神社が広がるということは、それを祭った氏子が広がるということになります。その例として、話は関東にやってきます。

今朝の読売新聞を開いてみますと、一面に浅草三社祭に二百八十五万人、・・・という記事が載っています。この三社祭の祭神がまさか朝鮮渡来系とは、皆さん思ってないでしょう。・・・

どうしてそんなことを言うかと言うと、浅草寺は百済仏です。まあ仏教は公然と仏教伝来がありますし、浅草寺の秘仏が百済仏であり、長野善光寺もそれであるということは、かなり広く知られています。

それよりも三社の祭神がどうして朝鮮渡来の神様なのか。「東京都の歴史散歩」という文庫本を見るとよくわかります。・・・日本書紀には685年から760年の間に六回、渡来してきた百済、新羅、高句麗の僧俗男女多数を武蔵野国に置く記事がある。とくに716年には高麗郡、また758年には新羅郡が新設される。・・・

つまり浅草三社の神様というのは、浅草寺の仏像が漁をしたときに網に引っ掛かったという伝説になっていますが、その人間は土師直中知、檜前浜成、同竹成である。・・・

土師中知という土師氏も百済系です。今の羽曳野市、「近つ飛鳥」の河内のほうの飛鳥に行きますと飛鳥戸神社というのがあって、百済の混伎王（こんきおう）を祭る神社があります。みな百済系の渡来人ですが、これを祭るのが浅草三社です。・・・これを知ったら、二百八十五万人も行かないかも知れません（笑）

そして高麗郡は池袋からすぐです。・・・まず飯能ですが、ハンナラという言葉のなまったものだそうです。・・・ナラとは朝鮮語で国ということだと言いましたね。

*奈良もそうです。

飯能はハンナラ、韓国ということだそうです。・・・今でも高麗という駅があります。・・・高麗神社は今でも栄えています。戦時中から非常に栄えた神社です。・・・高麗神社におまいりすると、戦地に行っても弾に当たらないというんです。・・・そればかりか、どういうわけか偉い人がたくさんおまいりする。何とか

の宮様とか、ある新聞にでていましたが、検事が事件が迷宮入りになると高麗神社におまいりする（笑）。

この高麗神社の宮司は今でも高麗氏で五十九代目です。そして分社が武蔵の国に約百三十ほど広がっています。あるところでは白髭神社になっており、あるところでは大宮神社、あるところでは広瀬神社というふうに名を変えています。高麗神社の分社です。

ここで一つの問題は白髭神社です。白髭神社は全国至るところにあります。早い話が浅草に白髭橋、白髭神社があります。浅草の白髭神社は由緒書きを見ますと、近江の白髭神社を勧請したものです。

琵琶湖に行きますと、デパートの高島屋が興った高島郡に大きな白髭神社があります。比良山地がありますが、この比良も本当は新羅だったのです。関西に行くと言屋のことをなんと言うかご存知ですか。ヒチヤと言うんです。シガヒになるんです。……僕が一番悩んだのが、高麗神社の分社に白髭神社があることです。

ぼくは日本全国をほぼ歩いていまして、白髭神社はどう見ても新羅系の渡来氏族が祭った神社です。なのに高麗神社の分社に白髭神社があるのはどういうわけか、

……その澄雄さん（*五十九代目の宮司）の話でチラッと、そこに高麗神社が祭られる前に白髭神社があった。それが衰微して、その上に高麗神社が重なったものです。……つまり猿田彦と一緒に祭っているんです。高麗若光と今でも。猿田彦は白髭神社の神様です。日本で言う国つ神です。

白髭神社が退化して、そこに高麗神社がかぶさって出来た。……そういう具合にしてできたということ、ひとつ理解しておいて欲しいと思います。

高麗神社にまいりますと、系図をみせてくれます。ただし、副本です。……系図のことを朝鮮では「族譜」と書きます。「ジョクポ」と言います。……この系図が鎌倉の中期の1259年に焼けてしまって、しかも高句麗から彼らが渡来したときに持ってきたものが、全部一緒に焼けてしまう。

系図が焼けてしまったので、高麗宗家から出た枝族の有力者が集まってそれを再編集します。朝鮮でも族譜を二十年ごとくらいに宗家に集まって再確認、再編成するんです。……

その時に集まった記録が残っています。これは非常に貴重なものですが、高麗、高麗井、駒井、井上、新、神田、新井、丘登、岡登、岡上、本所、和田、吉川、大野、加藤、福泉、小谷野、阿部、中山、武藤、芝木の各氏が集まって、系図を再編集しています。

「千七百九十九人の高麗人をもって高麗郡を置く」ということが、「続日本紀」にはっきり出ています。716年に高麗郡が健郡されるわけですが、その長の分かれたものだけでも、鎌倉中期の1259年までにこれだけあります。今にしてみれば、その分族がさらにどのくらい分かれたか、わからないです。

高麗家から分かれたものとしては、一番有力なものが金子氏です。八高線に金子という駅がありますが、ここが彼らの本拠地だったのです。高麗から分かれた分家ですが、これがだんだん広がって、もと粕江郷の調布のほうまで広がってきます。

・・・ここは昔、狛江郷と言いまして非常に広い範囲にわたっていた。井の頭公園までずっと狛江郷だった。江戸時代末期までは狛江百塚と言われて古墳のたくさんあったところです。

・・・この亀塚古墳を戦後になって、国学院大学の大場磐雄氏らが発掘しました。典型的な高句麗の古墳です。

今はけもの偏になって高麗を狛江にしていますが、いろいろな遺跡がまだたくさん残っています。・・・こういう具合に高句麗系は川崎のほうまでずっと広がりますが、高麗神社の高麗さんはどこから上陸したかという、大磯です。

・・・今でも毎年7月18日にお祭りが行われていまして、高麗の若光がそこから上陸するという神事です。ここに高句麗の連中が上陸して、一方は埼玉県の武蔵野に広がってくる。一方は箱根のほうに広がって、箱根権現になります。箱根に駒ヶ岳というのがありますが、あれは馬の駒ではない。元は高句麗のコマです。・・・箱根権現、箱根神社です。・・・大磯の高麗神社の分社です。

しかもそこからさらに広がって、熱海に行って伊豆山神社になります。

・・・ところが、そうしてしばらくたったら、山形県に寒河江(さがえ)市というところがあって・・・

ところがなんとなく気になって、寒河江がどうして朝鮮語なんだろうと思っていたところ、ちょうど丹波基二氏の「地名」という本が出ました。・・・そして「寒川」というところを開いてみたんです。そうしたら、「朝鮮語のサガ(私の家、社などの意味)から来る。朝鮮渡来人の集落があった。寒川神社はその兵神」と書いてありました。要するに、寒川神社は朝鮮からの渡来人が自分たちの祖神を祭った神社だというわけです。

・・・これは高句麗の連中が来る前に祭られた神社です。行って見て、古墳などの状況から、そうわかりました。そこでまたかぶさったのです。

しかも一方に秦野というところがあります。小京都ともいいます。ここに行きますと、祇園という地名もあれば、賀茂という地名もあります。大秦野という駅もあります。そこには新羅・加耶系の秦氏族も来ている。

そればかりか、池袋から東上線に乗ってみますと、志木というところがあります。これは新羅がなまったものです。しかも途中で白子というところがあります。これは新羅の連中が居住したところです。

白というのは、神社では白山神社というのがほうぼうにあります。とくに愛知県や岐阜県には数百あります。新潟その他全国にまたがってあります。これも本当は白山比咩神社です。

埼玉県に白子、志木があって、新羅郡から新座(にいくら)になった。神奈川県では高座(たかくら)郡ですが、これは高句麗です。埼玉は新羅だから新座です、今は新座市になり・・・

しかも群馬に行きますと、もっと濃厚です。吉井というところがあって、「続日本紀」をみると、百五十八家が吉井連(よしいのむらじ)という姓をもらうんです。甘楽郡といえば、日本でいちばん蚕のとれるところで

すが、元は韓郡です。鏡川がありますが、これも韓川だったのです。

吉井というのはどういうところからきたのか知りませんが、新羅系の連中は吉井連という姓をもらうわけです。

栃木県にいきますと、那須国造碑というのがあります。これも新羅です。こういうふうに関東だけでもたいへん濃厚に遺跡を残してしまっていて、大和や関東の遺跡をみるだけでも、高句麗系、新羅系、百済系がまんべんなくあり、九州に行くともっと濃厚です。

ただ、非常に薄いのが北海道です。東北まではまんべんなく、先ほど八、九割までが渡来人だと言いましたが、これは日本全国どこでも当てはまります。

古代史はおもしろい

神社についてさきほど分社ということを行いました、これがあるために日本の歴史がたいへんわかりよくなっているのです。高柳光寿さんだったと思いますが、古代、中世は神社は独立国だったと言ってます。共同体の中心は神社だったのです。昔は国家はないんです。国家もなければ、民族もない。だから日本人もなければ朝鮮人もなかったのです。ただの人間です。彼らが朝鮮から渡来してきて、一つの集落を作ります。そうするとまず精神的よりどころとして、首長が死ぬと、それを祭って神社をつくる。その神社を中心に共同体の集落が動く。

しかも神社は精神的なよりどころであったばかりか、兵馬の権をも持ったのです。祭祀権を持つということは、兵場の権をも行使したのです。だから共同体の独立国だったのです。朝鮮では今でも長男が祭祀権を持ちます。・・・特に日本の昔は祭祀権を持つ者が兵馬の権をも行使したわけです。

そうやって神社の集落、共同体が大きくなります。大きくなると分家が行われます。今は土地を買って移るためには、一坪百万円だ、東京なら千万円だみたいなことですが、そのころはそうではない。行って住めば、それで良かったのです。別に地主も何もなかった。行って縄を張って、ここだと言えばいい。そこに神社を勧請して、住めばいい。そういう具合にしたものですから、神社があちこちに広がっていきます。

日本の皇国史観の歴史によると、神功皇后ということで紹介しましたが、古代日本は任那日本府を置いて四世紀から六世紀に渡って朝鮮半島南部を支配したということになっています。

たとえばローマがイギリスを支配した。これは文献がなくても遺物・遺跡でわかります。では、日本の大和朝廷が二百年にわたって南部朝鮮に任那日本府を置いて支配したのならば、ぼくの言う「朝鮮の中の日本文化」がなくてはならない。ところがこれは一つもありません。

1910年に朝鮮を併合して、いわゆる「日韓併合」が行われたときに、日本の一流の学者と大きな予算をつぎ込んで、任那日本府を探そうというので一生懸命探したのですが、なかったのです。

しかも日本は近代になって36年間朝鮮を植民地支配しました。これは間違いのない事実です。また秀吉の話

も事実です。36年間に何かを残した。行ったら、残っていました。刺身という言葉です。これは朝鮮語になっています。下駄という言葉も残っています。あるいは弁当という言葉もあります。わずか36年でこういう具合に残しています。二百年ならもっと残しているはずですが、ない。

……だからといって、ここで注意して欲しいのは、僕は朝鮮人と日本人を同じものだと言おうとしているのではない。違ったものです。人種と民族は別物だということです。

人種と民族を混同するところから、誤解が起こりやすいのです。よく人種的差別をするなど言います。朝鮮人を差別するなどということですが、これは民族差別であって、人種差別ではない。人種はかわらないのです。同じ顔でしょう。ぼくが道を歩いていても、日本人か朝鮮人かわかりません。つまり人種は別ではない。しかし、民族は別です。

民族というのは、初めから民族があったわけではない。……

ですから奈良時代まではおそらく高句麗系、新羅系、百済系というのが明白にあって、対立していたと思うんです。それが千数百年の間になくなった。

つまり民族というものは、その風土における歴史の積み重ねによって形成されるものである。……だから民族というのは近代的な概念です。国家、国境、民族というものと、人種は別物です。

民族的にはわれわれははっきり違います。……初めに大和朝廷ありき、というのほうそっぱちです。朝鮮もそうです。朝鮮民族も徐々に歴史的に形成されたものです。これをわれわれは理解する必要がある。それ以前は人間時代というのでしょうか。まったくの平等といいますが、入国管理庁もなければ、パスポートもなかった。自由に行ったり来たりしていた。そういうことをわれわれは知っておく必要がある。そういう目でわれわれは現代をも見る必要があるのではないか。

聴衆の質問に答えて

……ぼくの証拠は日本の学者が書いたもの以外にあげないことにしているんです。そういう本を書いても、すべて日本の学者以外のものは引用しません。韓国の学者も北朝鮮の学者も研究していますが、ずいぶんあるのですが、それらは引用しないことにしています。日本の学者、文学者の書いたものを読んで、実地にそこへ行って見て、ということをやっています。

……金多遂というのが新羅から従者をたくさん連れてやってきます。「日本書紀」に書いてありますが、きらびやかにやって来ます。これをつまり人質だと言ってるわけです。大変な人質があったものです。従者を連れてきた人質なんて、考えられません。それが後の天武ではないかという人がいますが、ぼくはちょっと違うと思います。

……伊勢神宮は金沢庄三郎氏がはっきり書いているように、伊勢とか宇佐のイ、ウというのは接頭語です。勢はソです。伊勢に行くと韓神山というのがあって、そこに韓神神社があります。今は小さい祠になっていま

すが、伊勢神宮はそこから始まるのです。

その韓神山は禰宜を祭った山です。禰宜というのは朝鮮語のネク、魂という意味です。そういうことで韓神山が伊勢にあるというのは、面白いでしょう。

もう一つ言語ですが、日本で一番権威がある地名辞典は富山房から出ている吉田東伍博士の「大日本地名辞書」だと思えますが・・・

去年になってやっと総論を開いてみると、「地名原義論」というのですが、こうあります。「上古には、日本語と韓国は、同語同言の人民たり、各自にその法俗を異にしたるにせよ、語言の根源においては、理論上まったく同一に帰せられる。この際の異動の論は、もっぱら転訛の程度いかんというにあらん。すなわち転訛の差異が、両国の差異を示すにすぎざりけん。もしそれ、両国ともに古言を保守して、転訛なき名詞のあるあらば、古今同名というを得ん。されば、本邦古言の考証は、多く韓語によりて資益せらる」と、つまり古代は同じ言葉だったということです。

ぼくはこれ以前から疑問に思ったのは、天智朝（近江朝）に数千人の人々が百済からくるでしょう。百済が滅びてから、高官がたくさん入ってきて、文部大臣兼国立大総長みたいなものになる。国務大臣にもなる。それらが、一体どういう言葉をしゃべったかということです。通訳付きの大臣というのは、どう考えてもおかしい。

その時代まではほとんどは同じ言葉ではなかったかと思えます。なぜならばドイツで最近、労働者の語（？）を調査した論文が発表されましたが、なんと5、6百語です。そうすると古代は百もあれば用が足りた。

・・・もう一つ、面白いことがあるんですが、朝鮮カボチャと日本カボチャは違うんです。ぼくは数年前にやっと朝鮮カボチャの種を手に入れて庭に植えたんです。いいカボチャができて、非常においしく食べたのです。さらにそのカボチャの種をとって、翌年植えたら、ちょっと違うカボチャができました。三年目、四年目になると日本カボチャになってしまった（笑）これにはびっくりしました。

人間も変わるのです。・・・そういう具合に二代、三代ですでに顔が変わります。カボチャばかりではない（笑）。そのように言葉もどんどん変わるものだということです。（1982年5月17日）

「日本の中の高句麗文化」

「高麗（こま）」のもつ意味

日本の中の高句麗文化ということですが、高句麗の場合、いや、朝鮮半島全体にしましても、もともとツングースとか、北から移ってきたものです。「三国史記」の「新羅本紀」などを見ましても、やはり、高句麗から来ているのです。伽耶にしてもそうですし、百済ももちろんです。ですから、高句麗は非常に基本的なものになっているわけです。

李朝の前、十世紀から始まる統一新羅以後の高麗時代が約五百年近く続きます。・・・古代日本では高句麗のことを高麗（こま）といい、それが後には朝鮮全体をさす名称ともなりました。高麗というのは非常に重

要な意味を持っています。たとえば、神社に行きますと・・・コマ犬がいます。だいたいみな「狛」という字を当てておりますけれども、地方に行きますと「高麗犬」と書いているところもあります。・・・そこでまずコマということですが、コマのもとにはクマです。クマは、高句麗ばかりではなく、古代韓国のトーテムといいたいでしょうか、朝鮮に檀君神話というものがある。これは日本の天孫降臨神話とも非常に関係があります。簡単にいいますと、これも天から降りてくるというふうなものです。

・・・それで、熊は聖なるものということになり、これは日本語では熊というのですが、朝鮮語ではコム(熊)といえます。そして、このコムはなまって日本の神様のカム(神)になります。神様という言葉がこれからきているわけです。現代表記ではカミですけれども、本当はカムなんです。だから、「かんながらの道」と言いますが、本当は「かむながらの道」です。

日本には熊野とか熊野神社というのがあちこちにありますがね。有名なのは伊勢の向こうの三重県に熊野があります。この野は、古代ではヌと読んだ。そして、これは中島利一郎さんの「日本地名学研究」によりますと、古代日本では野は国土という意味も持ったそうです。そうだとすると、熊野はコムナラ、カムの国ということにもなるわけです。

朝鮮でもこのコムはカムとなり、カムナム、すなわち「神の木」ということにもなる。大木に神様が依りつくというのは、今でもありますね。そして、この神の木が日本語ではカムナビ(神奈備)になる。つまり神体山になるわけです。大和の三輪三山はご承知のように、本殿がなくて、裏の三輪山が神体になっています。これをカムナビといえます。これはカムナムから来ているのです。

神社は、いま朝鮮ではほとんどなくなりましたが、ダンモク(堂木)というのが残っています。神の依代としてのこれは、まだ残っています。みなさんは韓国の慶州に行かれて、感恩寺に行ったことがある方がいるかもしれませんが、廃寺の跡に大きな石塔が立っています。有名な海中稜のある近くです。感恩寺は以前は神国寺といって、その名残の大きな木が一本立っています。これは日本語では槐で、朝鮮語ではキモクという堂木です。そこにしめ縄が張られています。これが朝鮮における神社の名残です。つまり、これがカムナム、神の木です。日本でいう神の依代です。

日本全国に分布する「高句麗」

こういうふうに高句麗のクマだけでも、日本の神話、日本の神宮を考える場合、非常に大きな意味を持っているのです。

高句麗は日本全国至るところに分布しています。・・・北九州に高句麗ということだった「高麗」というところがあり、また「百済」や「新羅」もあった。「加耶」もありますけれども、加耶は非常に早くやってきたので、新羅の影に隠れるようになります。

・・・高句麗文化はいちばん濃厚なのはやはり畿内です。その次が関東、甲信越となります。畿内ではまず河内、河内は北河内、中河内、南河内とありますけれども、北河内、つまり今の枚方市あたりはみんな百済です。近くに秦というところがあって、新羅・加耶系も混じっていますが、こちらの百済は 660 年に百済が

滅んでからやってきた人たちが住んだところでは。

中河内はほとんどみな高句麗です・・・

次は京都、つまり山城国です。・・・木津川は、「日本書紀」の崇神天皇の条で見ると、もとは輪韓（わから）川です。輪は接頭語ですから、韓川です。これはまた山代川ともなっています。

・・・これが大和から京都に向かってきて、それが北上して、・・・東山山麓にある法観寺、八坂寺となり、そして八坂神社となります。八坂神社は全国に分社もたくさんありますけれども、まず思い出されるのは日本三大祭の一つといわれる祇園祭です。その神社の近くに、いまも八坂寺の塔が残っています。

・・・由緒書きというのはほとんどみな、マユツバですよ。・・・しかし、よく見るとおもしろいんです。「文は人なり」という言葉がありますけれども、・・・ごまかしても、どこかチョロツと本音が出る。・・・

それで、必ずもらってみることにしますが、八坂神社に行ったときももらいました。そしたら、その由緒書きにこう書いてあるんです。

・・・略・・・

さらに、林屋辰三郎さんの岩波新書の「京都」という本にはこう書かれています。

・・・略・・・

簡単にいいますと、八坂神社の初めは、高句麗から来た氏族の祖神を祭った。・・・祇園祭も、最初は高句麗系渡来氏族によるその神社の祭りから始まったものです。このように、東の八坂神社は高句麗系で、西のほうは新羅系です。京都というところは非常におもしろいところで、百済系ももちろんあります。のちには今来の神も入ってきます。平野神社なんかがそうです。

このように関西にも高句麗系など、古代朝鮮から渡来したものが残した遺跡が色濃く残っていますが、これはどちらから来たかということ・・・いちばん大きな入り口は九州の博多湾です。もう一つは北陸の敦賀湾です。もちろん、それだけではありませんけれども、畿内あたりに展開した高句麗系渡来人、この二つの湾から入ったものもありますが、どちらかということ、北陸の日本海沿岸から入ったもののほうが多いように思われます。たとえば、新潟沿岸からあたりからたくさん入ってきています。潮流の関係でそうなったようです。

ぼくはずっと全国を歩きながら、いちばん驚いたのは長野県です。長野県は日本の尾根といわれるところでは。そこに、なんと高句麗の連中がたくさん来ている。しかも、非常に古くからです。

われわれは古墳遺跡を見る場合、考古学的事実、つまり古墳があって、・・・問題は、その古墳から何が出土するかということです。・・・

・・・ここでついでに言うておきますが、韓国のソウルで出ている六月二十八日付（1987年）「朝鮮日報」を

見ると、「日本で韓半島型櫛目紋土器が大量に出土した」というんです。これは BC 三千年のものだと大きく出ていますが、まだ日本の新聞には出ていません。

古代史を勉強するうえでは、大阪や九州で発行されている新聞を見ないと困ることがあるんです。たとえば、天皇家に関係あるものは、東京あたりでも新聞に大きく出ます。たとえば聖徳太子のことがこの前、大きく出ました。そういうふうによく出ますけれども、天皇家に関係ないものはあまり出ないんです。おそらく、これは九州の新聞に出たかと思いますが、何しろ BC 三千年ですから、今から五千年前です。そうすると、朝鮮の檀君というのも全くの神話と言い切れないということになります。いま韓国では論争が起こっています。檀君時代をどうみるか、・・・まだ続いているようです。

長野の「高句麗」

とにかく、文献とそういう考古学的事実とがピタッと一致するところ、これは畿内のほうでもいろいろありますけれども、それがいちばん一致するのが長野県なのです。これは驚くべきことです。

ここは全体として高句麗系のものが非常に強いところですよ。たとえば、上田市の近くにも駒形神社だと、いろいろありますが、JR 線に篠ノ井という駅があります。この篠ノ井はどこから来たか。・・・

名字は、朝鮮人は二百いくつしかありません。中国人もそんなにないそうです。しかし、日本人の姓は数十万です。・・・時々、とてつもない名字をみるがあります。全くあれが名字かいなと思うものもあります。これは、基本的には地名から出たものです。

朝鮮も今は金さん、朴さん、李さんとなりますけれども、昔は、たとえば「日本書紀」を見ましても、百済が滅びてやってきた人の中に、鬼室集斯とか沙宅紹明とか、二字姓になっている。これはもとはみな地名です。沙宅というところが、今でも全羅道にあります。地名が姓の始まりです。中国の影響を受けて、朝鮮は一字姓の金さん、李さん、朴さんとなりますが、しかし、全体がそういう姓をもつようになるのは、本当は高麗時代になってからです。

日本では、いわゆる土族以外はみな姓がなかったわけです。・・・だいたい地名から始まるわけです。

地名はその歴史の化石であるという言葉があります。・・・谷川健一さんが主宰している日本地名研究所が川崎にありますが、京都にも今度、地名研究所ができたそうです。古い地名を保存する。地名は歴史の化石ですから、非常に大事なんです。

・・・ある時、松本かどこかの古本屋に入ったら、・・・の「近世信濃文化史」という本がありました。

・・・「信濃二千六百年史」で栗岩氏は、「積石塚とは封土の代わりに石塊を用いて高く築きあげた塚のことであって・・・明治末年師であった鳥居博士から・・・方面の高句麗の古郡一帯の古墳が皆積石塚であることを聞いた時に、我らの故郷にも三韓中の最奥地方の文化が流れているのを・・・」

どうして、朝鮮半島北部のものが信濃にあるのか、と奇異の感をもったというのです。だれでももちます。ぼくももちました。そして、つづけてこうあります。

「・・・南北四里内外、更科、高井両群にわたって、実に一千箇に近いものを数え得るのである。殊にその中央部にあたる更科郡北端の大室集落の如きは現在百戸内外の集落地籍に二百六十内外の存在を数えるのである。」

と述べているが、この積石塚の分布は南は小県、北は下高井郡の瑞穂におよび、さらに西は上水内郡の旭山、？山から下水内郡の長峯丘陵に及んでいる。これらについては、記録には何も伝えられていないから分明を欠くが、相当多数の帰化人のおったことだけは否定することはできない。

・・・長野市、飯山市、須坂市、中野市、更埴市、上田市などとなっている。そこに千以上を数える高句麗系の積石塚古墳がある、というわけです。

いま松本市に須々岐神社があります。松本市が長野県を中心であるか、あるいは長野市が中心であるか、いろいろな議論がありまして、今でも松本が信濃国の中心地であったという意見が濃厚です。なぜかというと、長野は善光寺によって開かれた町で、これは百済系です。後から来た者たちの、その門前町として開かれたのが長野市です。それから、須々岐は同時に鈴木でもあるわけです。・・・

平安時代に入ると、日本の朝廷が安定した。安泰となったために、自分たちは日本人になる、そのために日本人らしい姓をたまわりたいと天皇に願い出たわけです。それでそういう姓をもらったという記録です。・・・しかし、姓をもらったりするのは、選ばれた連中、いわば支配層の人々です。下層の人々は全く姓がない。姓のない人はもっとたくさんいたはずです。

これを読んで、ぼくらはどういうことを考えるか。一、続日本書紀 延暦八年とは、西暦789年であり、二、日本後紀 延暦十六年は797年であり、三、日本後紀 延暦十八年は実に799年であります。これでわれわれがわかることは、篠ノ井は高句麗から渡来していた前部秋足等の改姓名であり、その居住地であったということである。

799年というと、平安時代です。・・・それまで高句麗から来た人々は、つまり平安時代まで下部とか前部とか後部とか、高句麗にあった官職名を姓にしていた。かれらはみな向こうの貴族だった。それを姓にしていたということです。これは驚くべきことです。

なぜ驚くべきことかということ、高句麗は668年に滅びています。伽耶は562年に、真っ先に滅びますけれども、次は百済が滅びます。・・・朝鮮にはもう高句麗はないんです。統一新羅しかない。・・・にもかかわらず、彼らは日本の屋根といわれる信濃国に住んで、しかも799年に至るまで、高句麗の官職名を彼らの姓にしていたという事実を、皆さんはどう思いますか。

つまり、極端にいうと、信濃国は高句麗国だったんです。朝鮮では、もうとっくに高句麗はないんです。にもかかわらず、信濃では高句麗がまだ生きていたわけです。そしてそれがたくさんの古墳をつくり、それを残しているのです。彼らが五世紀からそこに住んでいたという事実は、驚くべきことです。

また、これがどうひろがっていくかといいますと、甲斐、山梨のほうに広がっていきます。山梨県には北巨摩郡、中巨摩郡、南巨摩郡がありますが、これはみなそうです。

.....

「恐ろしくなった」 - これはどういう意味かわかりでしょう。文献を見たら、奈良の都はもう終わって、京都に都は移っているわけです。その時まで、甲斐国だけでも 190 人からの百濟人が、自分たちの故国の、つまり朝鮮半島における姓や官職名をそのまま使っていた。これは山梨だけではありません。全国至るところ同じです。森浩一さんが恐ろしくなったというのは、そういう意味です。

東京・埼玉の「高句麗」

駿河は静岡県、甲斐は山梨県、上総、下総は千葉県、常陸は茨城県、下野は栃木県です。.....ここにいた高麗人 1799 人をもって高麗郡をつくった。.....平野だけは恵まれていますけれども、荒無地です。そこを開拓するために、駿河や甲斐などに住んでいた高麗人を集めたわけです。

これは今来、あとから来た者たちなんです。.....

弥生時代以来、だんだんと人口が増えて、国家ができて、許可を得ないでは勝手にいけない。初めきたものはどこにでも住んで、おれの土地だといえば、それまでだった。勝手に住んだわけです。ところが、今度は朝廷から統制される。それであちこちに配置されたのです。

ところが、先に来た新羅系、百濟系、高句麗系はほぼ日本人化しているんです。もう数百年たっていますから、土着化して、いわば、日本人になっている。

その土着化した者と、あとから来た者とが悶着を起こしてしょうがない。そこで、あとから来た者を一箇所に集めて、おまえらはここへ行って開拓しろということで、高麗郡が置かれたのです。そして、その指導者として、誰を選んだかということ、さきほどの大磯を中心にしていた若光を連れてきて、高麗郡大領にした。つまり、郡長にしたわけです。この人はなかなか人徳のある人だったらしいです。.....

九州の「朝鮮」

.....高句麗系の渡来人に的を絞ってみただけで、こうなるんです。そこへ更に新羅系だ、百濟系だ、伽耶系だといことになると、これはもう大変です。

つむじ曲がりが出て、稲作は中国の江南からだとかいう。そうかもしれませんが、そうだったとしても、それはまず朝鮮に入って、それが変容してこちらへ入ってくる。なぜならば、朝鮮は、その遺跡から、西暦紀元前 7、8 世紀には稲作が行われていたことが明らかです。

日本の場合には、紀元前二百年の弥生時代からです。数百年の差がある。そうすると、別に不思議ではない。入ってくることは自然なんです。

・・・須恵器というのがあります。須恵器は朝鮮から工人が来てつくった。それも皇国史観でいうと、捕虜かなにかとして連れてこられたことになっていますが、そんなことはありません。

それから、・・・九州などで出土する伽耶製の土器のことを陶質土器といっています。豪族に随伴してきた工人がこちらに来て土器をつくりましても、それらが来る時に持ってきたものなんです。

・・・北部九州というのは、古代朝鮮からみると、まるで朝鮮そのものです。

知名なんかもそうです。加也山とか、あるいは芥屋(けや)というのがあつた。これは伽耶です。・・・それからまた熊本に行きましたら、年をとつた人は「はい」ということを「ネー」と言うんだそうです。「ネー」というのは朝鮮語の「はい」ということです。・・・

それから鹿児島に行くと、ふるいのことを「チェ」と言う。これも朝鮮語そのものです。びっくりしました。こういう具合に、九州はとくに、朝鮮が非常に濃厚に残っています。

日本人の祖先考

日本の原始・古代は縄文時代、弥生時代、古墳時代と続きます。それで、縄文人こそは日本人の祖先であると、よく言われます。弥生時代以後は、みな朝鮮渡来がいやだとすると、先ほどみた高麗郡の加藤さんや阿部さんなんか、どうしたらいいか、わからなくなります。そういう論理でいくと、これは高句麗系の渡来だということがはっきりしているのです。

ところで、その縄文時代は人口がどのくらいあつたと思ひますか。日本人類学界がおとし百周年を迎えて、それを記念した「人類学」という大判の本が出版された。・・・池田次郎氏の「日本人起源論の100年」をみると、そのことがこう書かれています。

・・・要するに、先住民の縄文人であるアイヌは、日本人の直接の先祖ではないといつてるわけですが、だいたい、縄文時代の縄文人というのは、この日本列島にどれくらいいたのか。・・・

そして、最も最新の方法を駆使した小山さんの調査結果をみると、弥生時代まで八千年続いた縄文時代の総人口は、中期が二十六万一千三百と一番多く、それが晩期になると、新たな寒冷の気候のため、七万五千八百になっています。・・・

それだ弥生時代になると、日本の人口は急に五十九万四千九百になります。・・・鳥居龍蔵がいつたように「朝鮮半島から弥生文化とともに」たくさんの渡来があつたからです。その渡来は古墳時代とともにさらにどんどん増えて、奈良時代には六百万近くになります。こんなふうには、人口のうえでも歴史的な交替があつた。

われわれはこのような人口の推移という角度からも、学際というんでしょうか、あるいは考古学、あるいは文献ばかりではなしに、人類学のほうからも総合して見ると、古代のことがよくわかると思います。

人種と民族

・・・渡来人をみんな「帰化人」にしまっている。帰化というのはそこに国があって、その戸籍に編入されることを言うわけです。弥生時代からかれらがやってきて、国家をつくったのです。それを帰化人というのは何としてもおかしいわけです。

よく「新撰姓氏録」が持ち出されます。それをみると、帰化人が約三分の二だと、学者がいいいます。というのは、神別、皇別、諸審となっていて、三分の二は諸審です。これだけみても渡来人のほうが多いわけですが、これが学者たちのいう「帰化人」です。神別というのは神様。それから出て、天皇になったものが皇別。それならば、この神様はどこから来たのですか。天から降ったわけでも地からわいたわけでもない。田名部雄一氏の「犬から探る古代日本人の謎」をみるとそのことがこう書かれています。

” 万多親王の作った「新撰姓氏録」(815)によれば、そのころ存在していた氏は、皇別、神別、諸審(渡来人)に分けられ、氏の三分の二は渡来人が占めている。このことは、氏のある支配層がほとんど渡来人で占められていたことを示している。しかもこのとき渡来人のものと区別された以外の三分の一を占める氏も、おそらくごく早い時期の渡来人(弥生人)の子孫のものであり、縄文人の子孫ではないと推定される ”

要するに、それらが日本人、日本民族となったのです。民族は、その風土における歴史的時間の積み重ねによって形成されるもので、初めからあったのではない。われわれはそのように変容したものにすぎないのです。

日本の中の高句麗文化を見ましても、ちょうど同じことが言えます。先ほどいいましたように、高麗神社ひとつ見ましても、高麗氏から出た阿部さんや加藤さん、吉川さんや金子さん、これは完全な日本人です。もちろん、高麗さんもそうです。そういう具合に考えるべきであって、皇国史観みたいに初めから大和民族があって、どうのこうのというものではないということです。 (1987年6月24日)

日本の中の天日槍

天日槍とは

・・・近江は非常に天日槍の遺跡が濃厚なので、書いてありますけれども、天日槍のその重要性についてはほとんどふれておりません。十数年、各地を歩いてみますと、この天日槍という存在が大変なものであるということがだんだんとわかってまいりました。

たとえば伊勢神宮です。・・・伊勢には韓鉞という地名もあります。・・・だんだんたどっていきましたら、これの発祥の地は丹後なんです。・・・そこに籠神社というのがあります。

これは伊勢神宮の元である。ここは天日槍文化圏といってよいところなんです。つまり、丹波、丹後、三丹地方といいまして、この辺は天日槍の文化の非常に濃厚な地帯である。

その籠神社をいつき祭ったのが、天日槍族という言葉これから言いますけれども、天日槍族を出石人(いずしびと)ともいいまして、それが建てたのが伊勢神宮であるということをはっきり書いている人もいます。

天日槍はレジュメにも書きましたように、「日本書紀」では「天日槍」と書く。「古事記」では「天日矛」と書きます。これをどちらも新羅の王子ということにしております。けれども、決してそれは新羅の王子などという個人ではなくて、これは新羅系渡来集団の象徴のようなものである。つまり、天日槍というのは人間の名前ではないんです。

古代日本の中の天日槍

これは新羅から渡来した矛や剣で神を祭る集団の象徴のようなものであるということは、直木幸次郎さんも「兵庫県史」の第一巻に書いております。新羅人は太陽を祭ったわけです。いわば天日槍(矛)とは、そのための道具なんです。

・・・水谷慶一さんの本によりますと、太陽を祭るのに「とじ」という言葉がでてきます。そのことをる説明しております、これを呉音では「つげ」というのだそうです。

「つげ」という地名は関東にもありますし、関西にもいくらでもある。・・・そんな具合に新羅人は太陽神を祭った。太陽神と同時に祖先を祭った。そこから神社が発生するということになるわけです。

まず第一に、「古事記」の中に日本の国の初めのことがどう書いてあるか。いわゆる天孫降臨です。・・・

「かれにここに天津の日子番の邇邇芸の命の石位を離れ、天の八重たな雲を押し分けて、稜威の道別き道別きて、天の浮橋にうきじまり、そり足して、筑紫の日向の高千穂のくじふる嶺に天降りましき」

ニギノミコトとは、いうところの天照大神の孫ですが、天照大神が孫を日本の土地に天から下すわけです。そして、ニギノミコトが高千穂の峰に天降る。そこで「此地は韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故(かれ)、此地は甚吉き地。」というのです。

つまり、この地は韓国に向かっているとして、「古事記」には韓国と書いてあります。ほかには「唐」という字にしたり、

「辛」に直したりしておりますけれども、ここにははっきりと韓国と書いてあります。

そして「此地は韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故」。「古事記」なんか読むと、「故」と書いて「かれ」といいます。それであるから、この韓国に向かっているところはよいところである。この「かれ」というのは「ゆえ」でいいのに、どうして「かれ」なのか。

これは明治時代ですけれども、東大の宮崎道三郎さんが出した「日本法制史の研究上における朝鮮語の価値」という論文があります。それによりますと、「故(かれ)」というのは朝鮮語なんです。これは今でも朝鮮語で「故(コ)」といいます。それであるから、それゆえにというのを、「クルン故(コ)口」あるいは「故(コ)口」ともいいます。……

それはともかくとして、では、そこは一体どこかという問題です。という前に……この「くじふる嶺」というのはどこから来たかということです。

たとえば、この本は天皇家の三笠宮崇仁殿下の編集した本で「日本のあけぼの」という本です。この中に、大和朝廷の創立者はだれかという項目がありまして、そこにこういうふうにか書かれています。

「天孫ニニギノミコトがイツモノオを従え、三種の神器をたずさえて、高千穂のクシフルの峰、またはソホルの峰に降下したという日本の開国神話は、天神がその子に、三種の神器をもち、三神を伴って、山上の檀という木のかたわらに降下させ、朝鮮の国を開いたという檀君神話や、六加耶国の祖が、ここに加耶というのが出てきますが、これは天日槍と重要な関係がありますから、覚えておいてください。「六加耶国の祖がキシという峰に天降ったという古代朝鮮の建国神話とまったく同系統のもので、クシフルのクシはキシと、ソホリは朝鮮語で都を意味するソフまたはソフリと同一語である」うんぬん。

つまり、「クシフルのキシ」というのは、これを朝鮮語で「クジ」といいます。金海の飛行場から近いところですが、加耶へ行きますと、これは加羅とも言ったわけです。

……そもそも、韓国の韓という字を書いて、「から」と読んでいるのはここから来ているんです。これは朝鮮語でも「カラ」、日本後でも「から」です。これは現代朝鮮語で「クジポン」といいますが、「クシフル」はここから来たんです。これは六加耶国の祖、駕洛国、すなわち加耶・加羅国を開いた首露王というのです。これがそこへ天降ったということになっています。クジポンというのは、その伝説の降った峰なんです。行ってみましたら、小さな、ちょうど大和三山のうちの天香久山みたいな山です。

……また、詳しくお読みになりたい方は、平凡社から「日本語の歴史」という本が出ております。……この「日本語の歴史」第一巻は「民族の言葉の誕生」というものです。……

要するに、この「古事記」の読み方は、ここに言う韓国はもちろん南朝鮮のことで、そこは天つ神、つまり天孫の故郷と解することが文章にかなった最も自然な読み方であるということをはっきり言っているわけです。先ほどの三笠宮の編纂した本に書かれていることと同じ事を言っているんです。

そして、さらに続けて、「天孫降臨が海北(南朝鮮)から筑紫へ渡ることを意味していたと見ることができる」「大和朝廷の天皇家の祖先たちは、海を渡って南朝鮮から北九州へ渡来し、そこを日本における最初の拠点としたのであろう」「南朝鮮から北九州へに渡った外来民族は、何代か後に畿内に進出した。これが神武東征伝説に反映していることはいうまでもない」と書いている。

つまり、林屋辰三郎さんが、天日槍の渡来伝説は神武東征伝説と全く同一のものであるとっているのと同じ

ことを、ここでも言っているわけです。神武東征伝説というのは、そのことを伝説化したものであるといっているんです。

そこで、こにいう「任那」について言っておきます。……

これは朝鮮語でいいますと、「任那(ニムナ)」というんです。これは主(あるじ)の国、または君主の国という意味です。日本という国号ができるのは、七世紀に入ってからですから、近江朝になってからです。……にもかかわらず、それ以前にどうして日本という言葉があったのか。ということで否定されておりますけれども、しかし、「古事記」や「日本書紀」は後に書かれたものです。八世紀にできたものですから、その時、現にある名前をもってつけても、別に不思議はない。

ですから、任那日本府を、「日本書紀」に書かれているとおりに文字とおりに考えるからいけないのです。……

加耶の中に安耶(あや)という小さな国があった。この安耶を安羅(あら)ともいい、安那(あな)ともいうわけです。……朝鮮語では、ラ、ヤ、ナというのは容易に転訛し合う言葉なんです。……

もう一つ例をあげますと、いちばん有名な神様に、大国主命があるでしょう。……中にこういう名前もあります。大穴持命。この穴というのは安那、ここから来ているんです。そうすると、大国主命にもなるでしょう。

加耶諸国の重要性

それでは天日槍というのはどこから来たかということです。ここで日本の天孫降臨のニギノミコトのあれとダブるわけですが、ぼくは新羅・加耶系とっておりますが、……朝鮮では高句麗・百済・新羅の「三国史記」という本がありますが、これは本当は「四国史記」でなければいけないんです。加耶諸国というのは、……もっと広がったんです。……非常に古くて、しかも日本とは最も密接な関係があるところなんです。

……いま韓国では加耶開発十カ年計画というのをやっております。そこから出土品がいろいろ出ています。そういう出土品と合わせて、今後、日本の国の成り立ちと加耶というのが非常に大きな問題になって浮かび上がってくるはずなんです。……

この加耶にはほかにまた多羅という国もあったんです。……「たたら」というのがあります。製鉄のふいごでしょう。要するに、天日槍集団というのは農耕文化を持ってきたものなんです。農耕文化というものは鉄文化です。多羅という国が最終的に滅びるまでには、国を挙げて日本にやってくるんです。

……その「続日本紀」の772年、……そこにはっきり書かれていますが、大和の高市郡は漢(あや)氏が全人口の八、九割を占めていた。漢字の漢を書くものだから、厄介なんです。これは安耶(あや)なんです。……つまり、百済に制圧されていた安耶。そこから彼らは十七の県の人夫を引き連れて飛鳥に来て、今来(いまき)に郡(こおり)をつくった。これが高市郡です。

・・・今来というのは、後からやって来たものということで、初めは「来」という字でしたが、後に「木」という字に変えるんです。・・・

これは百済・安耶系の今来です。今来というからには古来（ふるき）がなければならぬ。・・・当然、古来があるわけです。これを上田正昭氏などは「古渡り」といっています。これから話をする天日槍は、その古来なんです。

・・・やはり、新羅、加耶が日本の建国にとっては最も中心的な存在になる。

天日槍の遺跡と地名

先ほどの、韓国に向かい、ここは甚吉（いとよ）きところというのは、北九州の伊都国、魏志倭人伝に出てくる伊都国です。伊都国は北九州、今は福岡の前原町になっています。ここにおりたつわけです。

ふつつ高千穂といいますが、高千穂の峰論争があります。・・・これは古事記に書いてあるとおりに、われわれは素直に信じてよろしい。

というのは、宮崎県の高千穂は太平洋に向かっていて、韓国に向かっていないんです。・・・韓国に向かい、甚吉きところというのは、いま言った伊都国であったところの前原町です。そこに志摩半島というのがあって、・・・ここに「志摩」が出てくるということに注意してください。・・・

それでは、加耶から彼らがやってきた。天日槍とニギノミコトがダブるという話を先ほどしましたが、天日槍はどこからやってきたかという、ぼくは安羅とか多羅とかいうところから来たと思っています。

・・・要するに、天日槍を象徴とするひとびとがやってきた。加耶のなかの多羅と安耶がみんな、これは国を挙げてやってきたものであると、ぼくは考えております。・・・たとえば、いま「古事記」に出ている神功皇后のことを言いましたが、神功皇后の本当の名前は息長帯比売（おきながのたらしひめ）です。帯という字を書いて「たらし」という。「たらし」というのを多羅の姫と解釈したらどうですか。そうすると、天日槍の孫だということになる。

・・・では、北九州のそこに天日槍の遺跡はあるのかと考えられる方がいるかもしれません。たくさんあるのです。・・・

・・・有名な都市に唐津があります。これも「大日本地名辞書」をみると、もともとは「韓津」です。・・・それは、地名にしてもまず韓泊がある。大宰府の観音寺の資材帳には加夜郷、それから、・・・韓良（から）であったところなんです。韓良と書いて、からと読ませる。なぜこうなったかといいますが、和銅年間に地名を二字にすると命じられたわけです。・・・だから、和歌山県は紀伊国、本当は紀国です。・・・これは朝鮮でも古代、そうやって地名を二字にしました。ちょうど同じような時期に朝鮮でも行っております。

いま日本で何々郡と言うでしょう。もとは「評」という字を書かせて「こおり」と読ませたんです。新羅がこ

れだったんです。新羅はこういう字を使っていて、後に郡に変える。そして、日本でも郡に変えたんです。だから、朝鮮語では今でも「コオル」というんです。郡というのも全く同じです。・・・中曽根さんも韓国に行って、晩餐会でそんなことをいってまますね。あの人はぼくの本をだいが読んでいたんだそうです。・・・

今でも地名としては、志摩半島の近くに芥屋(けや)というところがあります。この芥屋は昔は鷄氷という字を書いて、それで「けや」と読ませた。つまり、加耶です。もっとおもしろいのは、糸島半島にかけて、そこは肥沃な前原平野なんです。そこの真ん中にポコッと一つの山がある。非常に秀麗な山です。これは志摩富士ともいい、また、筑紫小富士ともいっている山ですが、これが加也山なんです。・・・かつて韓良郷だったところに加也山があり、芥屋ということが今でもある。そこから、ここでは貝塚と書いてケヱツカと読むんだそうです。・・・

そればかりか、・・・背振山地というんです。・・・何か思い出しませんか。セフリ、ソフル山地です。それから、その横に早良(さわら)郡というのがあります。これはどちらもソフルのなまったものだそうです。・・・

しかも、古い糸島郡の教育会が編集した糸島郡史がありまして、それを読むとこう書いてあります。「・・・天日槍はまず新羅往来の要律(?)たる伊(都?)国を領有し・・・更に但馬に移りて但馬家の祖となりしなるべし。(久米邦武著「日本古代史に拠る」)久米邦武氏曰く「筑前雷山に存する神籠石は其(天日槍を指す)築きし古?なるべし。・・・」と。

この久米邦武という人は東大の先生だったんですが、東大を追われたんです。なぜ追われたかといいますと、「神道は祭天の古俗なり」、つまり、神社は天を祭る古俗だと、そういうことを言ったため、それが問題となりまして、帝国大学を追放されて、早稲田へ移った人なんです。天を祭ることは朝鮮の太陽神を祭ることでしょう。あるいは高句麗でもそうですが、天を祭る、要するに、日本の神道も朝鮮のそれだと言ったものだから、昔のことですから、問題になったわけです。・・・この人に著書がたくさんあります。

・・・この神籠(こうご)石というのは明治時代から論争になりまして、最近やっと決着がつかれましたが、これは古代朝鮮式山城なんです。石でもって城壁をめぐらせているんです。そのいちばん大きなものが・・・岡山県の鬼の城です。それから、久留米に高良神社があります。ここにも古代朝鮮山城があつて、いまなおあちこちで見つかっているんです。ぼくも行ってみました。それがソフル山地にもあるんです。

そこに雷山があるんですが、そこに雷山神籠石というのがありまして、今でも貯水池みたいなのがあつて、頑丈な水門跡の石罫がそのまま残っています。これはいわゆる逃げ込み城としてつくられたもので・・・敵が攻めてくると、その人民ごとに城に閉じこもるんです。そこに食料を置いて。水は絶対条件です。・・・

・・・それから、その南の肥前山中、肥前というのは佐賀県になります。・・・とある墓家というのは横穴石室です。

「・・・長野県社宇美八幡宮祭神六座の内気比大神あり」というのがまた問題なんです。「越前国官幣大社気比神宮の祭神と同一の神にして、天日槍を祀れるなり」とありますが、・・・福井県の敦賀にまゐりますと、そこに気比神宮があります。これは戦争中は官幣大社でした。この気比神宮と同一の神である。つまり、その天日槍を祀れるなりというのが北九州の伊(都?)国にもあるということです。

気比神宮と息長氏

・・・敦賀のほうへまいります。気比神宮の祭神をイササワケノミコトといいます。天日槍をイササワケノミコトとして祭っているんです。・・・今庄に行きますと、新羅神社があります。・・・いろいろと変えられておりますけれども、ここは新羅神社そのものです。そのものが二つ、この今庄という町にあるんです。

それから、敦賀にも信露貴彦(しろきひこ)神社があったり、敦賀半島の先のほうに白木浦というところがあります。ここは問題になっている原子力発電があるところです。丹生というところまでバスで行きますと、そこから山越えになります。山を歩いたら、足元からキジが飛び出すんです。そういうところでした。その峠を上って下を見ますと、絶壁なんです。でも、眼下に、本当に直下に集落があるんです。そこは十五、六件しかありません。・・・

そういうところで、毎年7月15日になりますと、外に出ている人が帰ってきて、お祭りを盛大にやる神社がある。それが新羅神社です。しかも、おもしろいのは、この集落ばかりではなくて、日本には出雲などあちこちにありますが、ここではニワトリを食わないんです。卵も食えないんです。今はおそらく食べていると思うんですが・・・

今でも出雲へ行きますと、三保関、ここも卵を食べません。・・・

どうしてそうなったか。新羅は昔、金の卵から国王が生まれたということで、金氏の国王がずっと続くわけです。その卵と関係あるニワトリがとまっていたところを鶏林といって、今でも慶州へ行きますと、鶏林という遺跡があります。それで、国号を鶏林にしたこともあるんです。・・・ところが、いま朝鮮でニワトリを食べないところはないです。・・・だけど、日本では食べないところが、たくさん残っています。新潟に行きますと、ニワトリ祭り、鶏神社まであります。

・・・ニワトリを食べないというのはどうしてか。皆さんはブラジルの勝ち組というのをご存知でしょう。外に出ると非常にナショナリズムになるんです。非常に国粹的になるんです。沖縄県人というのを、皆さんは、在日朝鮮人ほどではないとしても、差別しているでしょう。差別された人間です。棄民だったんです。捨てたんですよ。それで、日本が勝ったとばかり信じている。沖縄に来て、そこに米軍がいたりしても、なおかつ信じる。信じるということはしようがないです。どうしようもないです。

・・・それから、もう一つは外へ出ると気前がよくなる。また、大きくなる。銅剣やなんかを見ましても、九州から広形銅剣というのが出土していますが、韓国では細形なんです。こっちへ来ると、広くなるんです。古墳なんかも、向こうは小さいです。こっちはばかでかいでしょう。・・・

気比神宮のある敦賀の地は、近江における息長(おきな)氏族、これは大きな氏族で、日本の天皇家とも密接な関係がある氏族であります。・・・もと東大の教授で・・・斉藤忠さんに「わが国における帰化人文化の痕跡」という論文があります。

・・・ここに言う・・・の須恵器とか垂飾付耳飾、これは皆古代朝鮮から直行したものです。そこから出たも

のもって、わが国における貴下人文化と、斉藤さんは規定しているわけです。それを全国にわたって書いてあります。・・・

そして、いまいった山津照神社古墳と関係ある息長氏の中に息長宿禰というのがいまして、この息長宿禰を祭る神社がいま言った近江町の山津照神社なんです。ここは昔、安耶の安那、すなわち安那郷だったところで、それがのちに息長村となり、今は町村合併で近江町になってますけれども、この境内にある古墳が山津照神社古墳で、つまり、神社はその古墳を祭ったものだったわけです。

ぼくは、神社はもと古墳を祭るものであるという話をしたと思いますけれども、この息長宿禰が神功皇后のお父さんということになっています。そして、この息長氏族というのは敦賀を聖地とし、そこにある気比神宮を守護神としているんです。ということは、天日槍を象徴とした渡来系集団、新羅、加耶系渡来人集団から息長氏が出たということです。

・・・近江町というところは非常におもしろい。ここは、百済が滅びてからも、「日本書紀」なんかみますと、たくさんの方が百済からやってくるんです。おそらく、「日本書紀」に出ている分だけでも三千人を越すでしょう。・・・

七世紀の後半、660年に百済が滅びている。・・・白村江の戦いがあるわけです。日本は援軍を出して敗れる。しかも三万人の救援軍を日本から出したというんです。そのころ、日本の全人口は5、6百万です。そのなかの三万というのは大変です。なぜ滅びる百済に救援軍を出す必要があったのか。何故出したか。

それを、干渉戦だという人がいます。あれは日本が悪いんだろうと、そうではありません。それは間違いである。救援案を出したのは、一体だということです。そのことは「日本書紀」の天智天皇段をみてください。・・・

つづいて、沙宅紹明は法務大臣です。・・・鬼室集斯というのは・・・文部大臣です。これは達率（ダルジヨル）という百済の官位第二位の高官でしたが、それが日本にやって来ては、またそういう高官になっている。こういうふうにならぬに五、六十人の者にずっと叙位をするんです。・・・つまり、橋の実はそれぞれ異なった枝になっているけれども、それをとって、玉として緒に通すときは、同じ一つの緒に通す。つまり、一体だったというわけです。

このように近江町は百済と一体だったんです。そうでなければ戦いはしません。三万人も近くも出して、白村江で敗れて、しかも、なおかつ何千人という人間を運んで、近江の国、蒲生郡に移し、あるいは神前の郡に移し、そして、二千人に三年間も政府が食わせて、東国に移すというようなことはしないでしょう。そういうことがちゃんと「日本書紀」に書いてあるんです。それだけでも大変な数ですけども、しかも近江ははじめは、天日槍を象徴とする新羅系渡来人集団の中心地だったところです。

各地に残る新羅神社

それからまた、大津市には新羅神社があります。有名な三井寺をご存知でしょう。もと園城寺です。その三井寺に居kマスト、新羅神社があるんです。・・・

源義家の弟の源義光を新羅三郎義光というでしょう。新羅三郎義光はその新羅神社で元服したんです。義光がここで元服したというのは、この神社を氏神としていた氏子だったからですが、近江には佐々木源氏というのがあります。この佐々木源氏の祖神を祭ったのが新羅神社です。それがそうしてわかるのか、ぼくはあとになってわかりました。

浜松市の江ノ島というところに新羅大明神という神社があります。これは小笠原源太夫というのがここへ移ってきて、そこで埋め立て工事をやって、江ノ島というところを開いたんです。……

話は山梨のほうへ飛びますけれども、武田信玄です。これは甲斐源氏、または新羅源氏とも言ったんです。これは新羅三郎義光から出ているんです。……

話をまた近江の戻しますが、近江の高島町に稲荷山古墳というのがあります。……これははっきりと新羅と書いてます。

この古墳は誰の墳墓かといいますと、息長氏族の枝族の彦主人王の墳墓だということになっております。この彦主人王は越前の三国から辰姫を迎えた。その間に子が生まれた。そして、彦主人王が死んでしまったので、辰姫はその子を抱いて、福井県の三国に帰って育てた。それが男大？王、すなわち継体天皇です。

このように、天日槍集団から出たもの、それまで語るとなるときりがありません。……今日は触れませんでした、古代日本最大の民族で、宇佐八幡や稲荷神社などを祭った秦氏というのも天日槍集団から出たものであり、……また谷川健一氏の「白鳥伝説」をみると、……物部氏なども、天日槍集団から出たものとあります。

これまでのぼくの話聞いて、信州の言葉でいえば、腑に落ちるのが一つか二つあれば、まあまあとぼくは思います。どうも長い時間ありがとうございました。(1983年5月26日)